



## 年

に一度の遠征と、数回低山に赴く二十年來の登山仲間がいる。ここで得られた経験は、かけがえないものとして積み重なっている。映画やドラマ、ちょっとした旅行はいずれも新鮮味がかなりなくなってきたので、心震わすような感動を与えてくれるのは、体を酷使する登山が最後かもしれないと思う。だから、今年のそれが近づいてきても一向に気乗りせず、ともすれば止める理由を探している自分に気づくにつけ、一体どういことだと自分のことながら戸惑ってしまった。

はつきりした意思表示ができないまま遠征日が近づき焦りを感じていたところに台風七号が発生した。数日後の予報円は我々の目的地をすっぽり覆っていて、新幹線も高速道路も止まる可能性ありと発表された。鍛錬、睡眠、仕事、連日の熱中症警戒アラート、それぞれの負債がたまっていたばくは、まるで借り換えで凌ごうとするみたいに七号に飛びついた。

「台風七号が危ういです。見直した方がいいんじゃないですか。」

リーダーのOさんは、電話の向こうでいぶかしそうな顔をしていたと思う。少し間をおいて、「うーん、まあ行くだけ行って、必要なら変更すりゃあいいんじゃないの。」

と言った。ばくは少しいらついで、

「高速道路も閉鎖する場合ありつて発表してます。行ってしまったら帰りは大混乱かもしれませんよ。」

Oさんは、やっぱり少し黙っていた。様子の違うばくはどう言ったものか考えていたのかもしれない。もう一人のメンバーとも相談する、として一旦電話を置いた。ほごなくかかっていた。

「行けそうだから行くことにした。まあ言いたいこともわかるけど、今回は道連れになつてよ。」

ずぶ濡れになつて滑りやすい岩稜を下山する場面が浮かんだけれど、愚痴を言つて、悪縁を呼び込むのも避けたいので、もう何も言うまいと決めた。

山行に出かけてみると、鍛錬不足はさほど気にならず、山小屋での睡眠不足には閉口するもこれは毎度のこと、何よりも嘘のように天気に恵まれた。台風のごろのような黒雲が遙か南に見えたが、天空のほとんどは透き通つた青空になった。曙光がどう作用したのか放射状に後光を放つた北岳を目にしたら、それだけで心満たされた。

帰り道、くどくどと予見した渋滞も混乱も悪天候すらなく、寄り道さえ楽しんで帰つた。台風七号もぼくの臆病風もうまくかわしてくれた仲間の得難さを南アルプスの威容とともに記憶しておかねばと思つた。

空き家 18  
木幡智恵美

生家の思い出⑤

祖母は、私が幼稚園に上がる頃は田舎へ帰っていた。母の姉である伯母の家で面倒をみてもらっていた左脚に麻痺が残る伯母を再び引き取り、細々とではあるが養蚕も復活させたようだ。田舎に帰ると、やはり蚕棚には桑の葉が敷き詰められていた。

小学校に上がつてからは、夏休みに田舎へ帰ると、尼崎の伯父の息子で、私より三歳年下の従弟と過ごすようになった。従弟はまだ小学生ではなかったから、私が低学年の頃からだったと思う。母が私と従弟を連れて田舎へ行き、仕事がある母は泉南に帰り、残された従弟と私は祖母と伯母と過ごすのだ。従弟はわんぱく坊主のうえ理屈屋で、結構困らされた。「智恵美姉ちゃん、蚊も生きてんねんやから。殺したらあかんで」と言つて、私が手や足に集つた蚊を叩こうとすると、邪魔をする。しつこく付いて回られるのには参つた。チャンバラの相手もずいぶんさせられた。私に勝てないと泣く。泣いても棒を振り回し、「もうやめよう」と言つてもかかつてくる。とにかくしつこかった。海に泳ぎにいけば、水をかけてきたり、抱きついてきたり、脚を引つ張つたり。伯父の連れ合いの実家が近くにあり、従弟がそこに泊まりに行つてくれるとほつと一息つけた。

毎年のように従弟と夏休みを過ごしていたある年、一キロほど離れた父の実家に一緒に行ったことがある。何せ向こう見ずな従弟のこと、庭の脇にある、丸い井戸のよいうな物に乗つたかっている木製の板の上のぼつた。途端、板が割れ、脚が消える。慌てた従弟、「たすけてえ」と叫びながら、必死に柵にしがみつく。井戸に落ちこちると思つたのだ。ところが、そこは肥溜。深いところに落ちる心配はなかったものの、脚が糞尿にまみれてしまった。伯父の奥さんが井戸水で洗い流して下さる横で、いい気味だ、これで少しは従弟のわんぱくも治まつてくれればいいのと思つていた。

ただ、田舎の家にテレビが据えられたのは、従弟のお陰だ。「今時テレビがない家なんてあるん」とか散々に祖母に言い寄つたからだ。ほとほと困らされた従弟だけでなく、短い間でもずつと一緒にいたせいか、私に兄弟がいなせいか、別れ際はちよつと寂しく感じた。

30代フリーター やあ、ジイさん。今年の暑さは後期高齢者にはこたえるだろう。

年金生活者 ひと月余り前から毎朝40分ほど近所を散歩して、心身の調子を整えるようにしている。歩き終えて汗と疲れが引いていくときが、たぶん1日のうちでいちばん機嫌のいい時間だ。歩くのをやめると気分が落ち着かなくなりそうな予感があるので、「散歩依存」が始まっているかもしれない。

30代 交通事故にはくれぐれも用心してくれ。

年金 一番気をつけているのが自転車だ。とりわけこちらが気のつかないうちに後ろから接近してきて、すれすれで追い抜いていく自転車には、フィジカルな被害はなくても、メンタルな擦り傷や切り傷を負ってしまう。自転車に乗っている側にとつてはありふれたことでも、こちらにとつては不意打ちとなるからだ。それを防ぐため、後ろからの自転車

30代 たしかに他人の眼差しは気になる。年金 格闘家の桜庭和志がテレビ番組で、対戦中は相手の目を見ないようにしていると語っていたのを思い出す。「だつて、怖いじゃないですか」と、そのわけを打ち明けていた。眼差しというものの威力を彼は身に沁みて知っていたことを示している。

見ることを写真の撮影にたとえてみる。見る者は対象をとらえるとき、おのれの位置と向き、すなわち特定のアングルを強いられる。その場合、対象が物だと、どんなに見ても、その対象は変わらない。だが、人なら変わる。見る側のアングルが眼差しを通して相手に伝わり、相手を拘束する。すなわち相手は「見られる者」としてピン止めされる。

それは自由を奪われる不本意な状態だ。それから逃れようとして、見た者を見返す。それにもなつてアングルが変わる。その変化が眼差しを通して、初めに見た側に伝わり、その相手

の接近があることを常に想定しながら歩くようにしている。想定しておくだけで、「不意打ち感」が緩和され、ダメージもかすり傷程度にとどまるからだ。以前ならたちまち痛みと怒りを覚え、しばらくそれを引きずっていたが、それがあまりなくなつた。

災害や戦争を経験したあと、思い出したくないその場面を繰り返し夢に見る外傷神経症の反復強迫について、フロイトは「不意打ち」がその原因であることを指摘している。「こうした夢は、不安を形成しながら刺激を克服することを目指しているのであり、不安が形成されないことが、外傷神経症の原因となつていたのである」（「快感原則の彼岸」中山元訳）

フロイト自身は「不意打ち」という言葉を使っていないが、「不安が形成されないこと」というのがそれに該当する。「不安」とは心の準備の別名だ。反復強迫は事前にできなかつた心の準備を事後にすることを意味する。そうならないために、私は自転車の後

を拘束し、「報復」は完了する。

30代 見られるのがうれしいこともある。

年金 眼差しの威力は親しい者どうしでは逆方向に働く。見知らぬ者のあいだでは「警戒」のアングルだつたのが「受容」のアングルに変わる。「攻撃」「報復」は「贈与」「返礼」に変わる。

30代 散歩ひとつにも人生を感じる。年金 毎朝の散歩で感じるのは、クルマ、自転車、歩行者という道路上の3つの階級の存在だ。クルマは自転車を「ど

ろからの接近を事前に「不安」がり、「不意打ち」を免れるようにしている。

30代 歩くのもひと苦労だな。

年金 行き交う人たちと目を合わさなないようにもしている。目が合ったときに、相手の眼差しはこちらの両眼を射抜き、心臓に達して突き刺さる。その痛みが、歩く心地よさを台無しにしてしまう。

人を見ないようにするには努力が必要。放っておくと、つい見てしまう。赤ん坊が近くの人間をじつと見つめるように。そこには見知らぬ他人を警戒する本能的な何かが働いているのを感じる。

成長するにつれ、他人を見れば見返されること、見ることは時として攻撃と化し、その報復を受けることを知るようになる。見知らぬ他人にはできるだけ眼差しを向けないようにする行儀を身につける。今なお大人になれない私はそれが身につかず、赤の他人を必要もないのについで見てしまう。

け、どけ」と、車道から歩道に追いやり、歩道に追いやられた自転車は歩行者に「邪魔だ」と圧力をかけて走る。

そんな「階級闘争」のストレスから逃れるために、私は歩道が歩行者の通る部分と自転車の通る部分とに色やマークで分けられた道路を散歩コースに選んでいる。本来は車道を通行しなければならぬ自転車に歩道の通行を認め、それにもなう危険を回避するために、歩行者と自転車の分離がはかられている。

今の散歩コースは歩行者も自転車も通行量がそれほど多くないこともあって、両者の分離の恩恵をストレートに受けられ、神経をとがらせずに歩くことができる。すべての歩道でこのような分離がはかられるか、すべての車道に「自転車専用通行帯（自転車レーン）」が設けられれば、自転車の安全性は格段に高まるはずだ。けれど、残念ながらそれが可能な幅の広い道路は限られている。路上の「階級闘争」は終わらない。